

5年2組

 つるつるできれいな土器にしたい
 ～本焼きに向けて灯油窯で素焼きに挑戦～


灯油窯で素焼きをしました

分散登校中ではありますが、本焼きに向けての素焼きを行いました。あまかざり工房の職人さんが使っている赤土の粘土と、教えていただいた釉薬で本当に松代焼のようなつるつるで青緑色になるのかを確かめるための一段階です。これまでは、子どもたちは、野焼きや七輪、ドラム缶を使って焼いてきましたが、本焼きの事を見据え、学校にある灯油窯で素焼きを行いました。一人一人がテストピースとして作った箸置きを、およそ4時間かけて焼いていき



ました。30分ごとに当番を決め、Google ClassroomのMeetで接続しながら、火の番をしていきました。灯油窯の火力や温度の変化、灯油窯の様子などを記録していきました。お昼をはさんで温度がある程度下がったところで、灯油窯の扉を開けました。ずらっと並ぶ作品をみて「わあ、きれい」とKさんが言いました。焼く前の作品と見比べたH君は「赤が濃くなっている」と言いました。これまでの焼き方と比較して、割れることなく朱色のような色で綺麗に焼き上がっている様子に、灯油窯で焼くよさを感じているようでした。そして、灯油窯に残る熱気を感じながら、一人ずつ作品を取り出していきました。教室に戻った後、焼く前の様子と比較したり実際に触ってみたりして焼いた後の様子を観察していました。R君は「割れていなかった。だってさぎゅっと押してしっかり空気を抜いたから」と誇らしげに言うと、H君も「俺も空気抜くために何回も練ったんだよ」と続けました。割れないように中の空気を抜くための菊練りを見せていただいたことがここに生かされていました。また、実際に触った感触の中で、その音の違いも感じていました。K君が

「鉄っぽい音がする」と言うと、Mさんが「そうそう。なんか軽くなった気がする」とその音の感じから、不純物や水分が焼けてなくなったことでできた隙間を感じ、軽くなったことを感じているように思いました。Y君が「色が、あまかざり工房で見た素焼きの色に近い」とあまかざり工房でみた素焼きの色と比較しながら素焼きの色を捉えていきました。H君が「水に濡らしてみる」と言うと、Wさんが「割れるといけないから、先の方だけにしといたら」と伝えました。先の方に水を垂らしたHくんは「やっぱりしみこん



でいく。これもいいけど、釉薬塗らないと使えないね」と言いました。灯油窯できれいに焼けたからと言っても、これまでの素焼きのように浸み込んでいく様子から、釉薬をぬった本焼きに目を向けているようでした。

また、釉薬との偶然の出会いがありました。過去に使われたであろう青色や緑色の釉薬の残りが作品をのせる板についていました。「これほしい」とH君やR君は近くにあった工具を使って採取していきました。「はじめて宝石を見つけた原始人みたいだね」とAさんの温かいつつこみをもらいながら、採取した釉薬を大事そうに持っていきました。Aさんは、色合いの違う釉薬をみて「こっちの方が色が白っぽいから温度が低かったのかな」とつぶやいていました。あまかざり工房で教えていただいた色合いと温度の関係から推測していました。採取した釉薬をみて、「この青色にしたい」といっていたR君は「藁の灰とかで本当に青色になるのかな」と言った後、少し間が空いて「焼き加減でかわる」

と続けました。自分の目指す色を出すために温度にこだわっていくのだと思います。Wさんは、「これ何でできているんだろう」とその釉薬をじっと見つめ、それがどんな成分なのか考えていました。

これまでの学習を振り返った M さんの文章です。

五年二組では土器を焼いています。最初みんなで本やパソコンで調べてみたりしました。土器はできるけれど、よく見るようなツルツルのきれいな土器ではなくて、ゴツゴツの土器でした。土器のコツを知るために松代に行って、松代焼について学びました。あまかざり工房の職人さんの所へ行き、土器の焼き方や作り方、材料を学びました。空気を入れないようにしっかり練ったりするなど、学んだコツを生かして、もう一回みんなで作ってみました。今まで野焼きや七輪などで焼いていましたが、教えてもらった通り、窯で焼く事にしました。初めてなので、試しにみんなで箸置きを作って焼いてみました。みんなが交代で火の番をしました。大変でしたが、割れてないかなと心配しながらも、出来上がるのがとても楽しみでした。釉薬はまだ塗っていませんが、すごくきれいな色になりました。次は釉薬の色に注目して、作りたいです。(Mさん)

灯油釜での素焼きの次はいよいよ釉薬作りです。あまかざり工房で教えていただいた釉薬の材料の中に藁灰がありました。K君とKさんのお家の方々の力をお借りして藁を準備していただきました。この藁を灰にして安茂里の白土と木灰等を混ぜて釉薬を作っていきます。「どれくらいの分量で作るのかな?」と疑問に思ったR君。釉薬の分量を求めていく中にも学びがありそうです。